f

モト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
f

【Ｎコード】
Ｎ６７８９Ｓ

【作者名】
モト

【あらすじ】
そこには無名の天才画家戸田とモデルの咲子が住んでいた。
彼等を囲うはやり手の画商、河野。
じっとりとした時間が流れている。
そんなある日、戸田を取材したいと一人の記者がやってくる。彼等が垣間見るのは天才の狂気か、はたまた俗人の嫉妬か……。
２００３年春上演の脚本です。

※携帯表示　非対応です。

はじめに（前書き）

今見るとなんでこんなん書いたのかな？
って思ってます。
あの頃はいろんなものに嫉妬していたの。
今は違うけど。

はじめに

【舞台設定】

山深くにある一軒のアトリエ、その一室。
彼の部屋は二階にあり、一階部分は生活スペースである。
油絵具の独特の香り、沢山のモチーフやキャンバスが転がっている
雑然とした部屋。
下手に細長い木製のドアがあり、その向こうには廊下と階段がある。

そこには無名の天才画家戸田とモデルの咲子が住んでいた。
彼等を囲うはやり手の画商、河野。
じっとりとした時間が流れている。

そんなある日、戸田を取材したいと
一人の記者がやってくる。

彼等が垣間見るのは天才の狂気か、
はたまた俗人の嫉妬か……。

【登場人物】

戸田
咲子
河野
桂木
加奈江
モーションキャプチャー・影

踊り子たち

・戸田は天才画家であるが無名である。
・咲子は元ホステスのモデルで走り屋である。
・河野は戸田と美大では同期だった画商である。
・桂木は東京から取材できた記者である。
・加奈江はメイドである？
・モーションキャプチャー・影は戸田にしか見えない何かである。
・踊り子たちは戸田の妄想の産物である。

【まえがき】※２００３年当時のまま

前書き

所謂ビジュアル系なんだと思う。こういう演劇は…。でも、夏だし夏だけにホラー的な、なんか仕掛けに凝ったものがやりたくて、結局書いてしまった。構想５ヶ月。執筆期間一週間。ええ、短気だから一気にぶわあ～ってかかないと駄目みたいです。

面白い表現というものは単に笑いの要素ではないと思うんですよね。そもそも笑いというもの自体、常識から外れているから人は笑うわけで。だからお客さんがみて、わぁ。びびった～ってのを現したくて。でも上手くこの脚本で伝わるのかはかなり自信ないですヨ。なんせ殆ど処女作ですから…。ヴァージンですからん☆最後のほうとかね、ト書きがだんだんいい加減だし。

やっぱり既成の台本よりは創作がやりたくて。創作って演劇の醍

醐味！　というか。どんな駄目駄目劇でも創作は既成の台本を演じる団体には勝ってしまうのです。その冒険心においては。創作って普通は稽古場で作っていくものなのですが、ココにはレパ選ちゅうものがあるので、書きましたよ。とりあえず形になるように。でもコレが完成形ではけしてないでしょう。だって、役者さんが決まらないとなんとも…ってやっぱり思いますし、この台本、ストレートでまだ蛇行という、ゆとりがないのでその辺、稽古場やスタッフさんたちの意見をいただきながら、ここ、わかりづらい。とか、こうしたほうが面白いよ～とか、こいつはこんなしゃべり方しないから～とか、いろいろ取り入れながらやっていけたらいいなぁ。と思います。そしてまだ、なんかオチが甘いな。

実話なども参考にしながら書いてます。戸田のように作家が自分を使って絵を描いているのだといったような贋作画家はいたようですね。ただ結局のところ彼らが犯罪者扱いになってしまうのは周りのせいという。中には二束三文で本人は贋作として売られていることを知らずに工芸品を作らせ続けていたケースとか。残酷ですなぁ。

でも結局、加奈江は何なのかといわれたら、カナエはカナエでして。最後にちょっとありますが、無いものねだりを求めるココロの闇とでもいいましょうか。だから黒鳥なんす。

がっつり度派手にドカンと一発、でも背筋が寒くなるような、そんな劇を目指していけたらいいのに。

幕開け

幕開け

音楽が流れている。疾走感のある重厚な音楽である。
溶明。
一人の赤い踊り子（咲子）がライトを浴びている。その後ろに、黒い踊り子（加奈江）、それから紳士が見えるが二人は足元しか見えない（河野（こうの）・桂木）。それは一枚の絵。舞台両脇から白い布が舞い降りる。すると絵はみるみるうちに形を失っていく。

桂木　盗まれた！
河野　絵が盗まれた！
咲子　閉店間際の展覧会
桂木　颯爽と
加奈江　奇跡のように
戸田　ありえない！セキュリティーは万全だった。
河野　新聞各紙は競ってこの事件を書きたてた。
咲子　エドガー・ドガ『踊り子』デパートで盗まれる。
桂木　ドガ盗まれる、持ち主は藤城代議士
加奈江　踊り子はどこへ？　藤城議員の愛蔵品
戸田　もう出てこないのか
加奈江　捜査も虚しく、それから一週間、絵は見つからない
戸田　見つからないのか！
河野　見つからない
咲子　見つからない
加奈江　見つからない

戸田　お願いします。
　　返してください！
咲子　返してください！
戸田　あれは大切なものです
桂木　あれは大切なものです
戸田　返してください
加奈江　返してください
戸田　とても貴重な物なのです
河野　とても貴重な物なのです
戸田　どこにいったのだろう
桂木　どこにいったのだろう
河野　どこにいったのだろう……
加奈江・咲子　どこにもないわ！

舞台両脇から白い大布再び舞い降りる。布が去った後には、戸田が一人で唖然と佇んでいる。

戸田　あ……――。

暗転

朝の風景

「プロローグ」

朝、薄らとアトリエに光が射している。アトリエにはごちゃごちゃと色々なものが統一感なく置いてある。イス、机、ミシン、テレビ、ＰＳ２などなど。その机に上に空のワインボトルとグラスが散在している。アトリエでは男が一人、なにやら不審な動きをしている。何か探しているようだ。そこに、戸田の声が聞こえてくる。

戸田　おーい、咲子？
　おはよう、咲子知らない？
　……そうか、ありがとう。

男、戸田が近づいてくるのを察知して、狸寝入りをする。

戸田　あーあー、また飲み散らかして。
　まったく、人のアトリエを何だと思ってるんだか
　（戸田、男が眠っているのを確かめる）

戸田、机の上からペンを取り出す。そっと男に近づいて顔に何か書き出す。

河野　起きてるよ

戸田　知ってるよ
河野　やめろよ
戸田　また、そんなところで寝て、寒くないの
河野　朝方寒くて一度目がさめたけど
戸田　そうか、流石にそうでしょう
河野　まったくね、都会じゃ、もうムシムシして半袖の季節だよ、
　なんたってこんな山の中…。
戸田　君だって好き好んでこんな山の中に来たんでしょ
河野　好きじゃあない。好き好んで住む君の気持ちがわからんね。
　電車もない。地下鉄も無い。ビルも無い。わぁ！　満天の星空だぁ！
　気持ち悪い。寒いな、ねえ咲子ちゃんは？
戸田　ああ、多分ガレージでしょ。
河野　寒くないのか！
戸田　寒いだろう？
河野　や、そんな、さも当たり前だろ馬鹿！　みたいな言い方するなよ
戸田　言っとくけどさも当たり前だからね。
河野　そうじゃないって
戸田　ふふ、あはははは
河野　なんだよ
戸田　（顔を指す）
河野　（舞台袖に掃ける。しばらくたって）あああああーーー！
咲子　（舞台袖で、）どうしたの？　あら、失礼、来てたのね？
河野　違うんだ、いやいやちがく無いから、見ないでくれ！

　戸田、この間、ハーブティーを一口飲む。飲んでふっと外を見るような遠いまなざしになる。咲子、歯を磨きながら現れる。

咲子　なにあれ。
戸田　何だろうね、ははは
咲子　……。まさか、
戸田　寒くないのか
咲子　ん？
戸田　ガレージ
咲子　ん、寒くなくも無い
戸田　それ
咲子　ん？
戸田　ちゃんと洗面所でしなさい。
咲子　はあい

咲子、はける。はけたとたん大爆笑。

河野　（舞台袖で）ほっといてくれ！

戸田、カップを置いて部屋の隅に置かれたスケッチブックを手にして、愛おしそうに、抱きしめる。舞台袖からは咲子と河野の会話が聞こえている。部屋は朝日が差し込んでいる。戸田、テーブルの上の残ったワインを一口飲んで振り返ると、いつの間にか背後に加奈江が立っている。加奈江、テーブルに近づいてワインボトルに手を伸ばす。

戸田　いいよ、私が片付けておくから

加奈江　でも、
戸田　いいんだ。庭のハーブに水をやってくれ、
今日は暑くなるんじゃないかな

加奈江、無言で一礼して去る。戸田、ため息を漏らす。河野の被っていた毛布と開いたグラス、ワインボトルも持とうとする。一度もった荷物を置いて、ワインボトルを掲げる。

戸田　（モチーフになるかな？）

戸田、荷物を持って去る。舞台袖から三人の会話が少し聞こえる。舞台上には人がいない。
ちょっと風が吹いたような気配。少女たちの笑い声が聞こえる。それもとれとなくどこからか…。三人、談笑しながら舞台に現れる。

「朝の風景」

※ここから以下の三人の日常をこの文章から役者の皆様に起こしていただきたいです。エチュードから劇を作って、キャラと役者の一体感を高めたいです。最低限の会話のカテゴリーを文章にして載せます。

このシーンの中で戸田と河野、昔の思い出話などをする。関係性

を分かりやすく。河野は一度私立医大に合格し通っていたが、昔から得意だった絵の道に進みたくて仮面大学生をしながら美大に合格。なので同期といっても戸田とは2～3才年の差がある。

河野はイスに腰掛けると、壁を見回した。戸田はコーヒーを啜った。さして熱くもなかったが音を立てて啜った。自分のテリトリーに人が入ることがあまり好きではない。しかし、南東に面したこのアトリエが朝の空気を感じるには一番もってこいの場所だということも彼は理解していた。

咲子はバターをたっぷり塗ったトーストを齧っていた。妖艶な雰囲気とは裏腹に、仕草はかざりっけのない女だ。戸田は、ただコーヒーカップの見えない底を見つめていた。河野がしきりに、例の事件について語っている。

某有名百貨店の展覧会で、かの代議士の絵が盗まれたという事件だ。たしか踊り子の画家として名高い印象派のドガの名作で彼にしては珍しく、赤と黒の衣装を纏った踊り子の描かれている、小さな絵のことだ。盗まれてからまだ見つかっていないらしい。

警察も、犯人を特定できないままいる。「その代議士の先生は、絵を返してくれるなら、西欧美術館に寄付をするといってるんだ。寛大な人だね、まぁ、こうなってくると犯人としても、用意には絵を売りさばけまい。ここまで有名になったら、俺だって、買取はごめんだよ。でも惜しいことするよな。」と感想を交えつつ熱弁した。戸田は曖昧に話に乗りながらそのドガの絵について、空想していた。赤や、黒、繊細な、色々の色。

途中、戸田は加奈江を呼んだ。だが来る気配がない。咲子と河野が顔を見合わせた。戸田は独り言のように、彼女は庭にいるんだっ

た、と言った。咲子と河野が首をかしげていた、が、河野は空気を破るように先ほどの話の続きを話し始めた。

咲子はまだトーストを齧っていた。話の途中で河野の携帯がなった。彼は電波が入ることに驚きながら、電話に出るために席を立った。二人になると、突然咲子が話しかけた。

咲子　ねぇ、今日、どうなの？
戸田　どうって？
咲子　さっき、例の人から電話があってね、今日来る見たい。
戸田　そう。
咲子　喜びなさいよ。あなたの為にもなるんだから。
戸田　でも、あまり人と話すのは好きじゃないな。

そこへ、河野が戻ってきた。彼の妻が浮気を疑っているらしい。咲子は黙って戸田のそばを離れた。河野が冗談交じりに、今夜のご予定？　と聞いてきたので、咲子はムキになって、取材の人が来る旨を河野に言った。

河野は、こんな画家のもとに来る雑誌の記者はなんて物好きなんだろう、と茶化しながら、しかし、疑っている様子はない。これは、知られてはいけないんだ。

「壁」

咲子が、空いたカップを下げると言い、部屋を出て行った。河野はじっと、戸田に好奇の視線を投げかけていた。それから少し、取り留めのない会話をした。河野には絵を描かないことを冗談交じりに攻められた。戸田は次第に自分の中の彼への不満が募っていくのを感じた。

河野　最近、めっきりなのか？
戸田　何が
河野　コレ。こっちのほうも
戸田　……。
河野　冗談だ。笑え。にしても、仕事のほうは
戸田　お前の性だ。
河野　え？
戸田　今の世の中真面目な芸術家になって、
　自分の独創的で小さな片隅を作り上げようと思うなら
　孤独に身を沈めるべきじゃないか。
河野　独創的、ねぇ。しかしまぁ、だからこそ君はこんな山の中に
　住むようになったわけだろうから。
戸田　つまらない噂が多すぎるのさ。
河野　それは……。
戸田　芸術も結局株式市場の投機みたいに、稼ぎたがりや達の
　右往左往の中から生まれ落ちているみたいだ。
河野　わからないでもないが、だがなぁ、
　市場がなけりゃお前だって絵の具もキャンバスもなにより
　食ってけないんだよ。こと、お前みたいにこれ一本で食
ってこうって
　決め込んだ人間は。
戸田　偽者だ！

河野　馬鹿！
戸田　私は自分の中にある素直な動機によってのみ動かされているんだ。
　彼女たちの素直な動きを線に留めているだけで……。
河野　正直理解しかねるね。だが君はそれでいい。たのむ。絵を描いてくれ。
　いったいいつまで待たせるつもりなんだ。
　君の作品は私の専売だが、だからこそ、
　君にだってノルマが課せられるってものだろう？
　（咲子が入ってくる。手に持っている河野の携帯電話が鳴っている。
　が、なんとなくぎこちない雰囲気にドアの所でフリーズ）
　描かない画家なんて画家じゃない。哲学でもしていればいい。
　（咲子がいることに気づき、語気を弱めて諭すように続ける）
　きつい言い方になるが、こちらとしては君の心意気なんて、
　さして問題じゃないんだよ。
　お互いに暮らしがなければなにもできないだろう。
　判ってないかもしれないが。
戸田　君は私のパトロンか？

　戸田、鼻で笑いながら、イスに座り込む。河野は戸田の捨て台詞も聞かぬままに、咲子の手から携帯を受け取ると、話しながら出て行く。咲子と戸田。ぎこちない空気。

咲子　どうしたの？
戸田　別に。
咲子　あまり、怒らせないほうがいいんじゃない。
戸田　……。
咲子　そういえば、最近、私のこと、あまり見てくれなくなったね。
戸田　……。
咲子　昔はよくスケッチブック片手にいろいろ描いてたじゃない。
戸田　描く気がしないんだ。
咲子　私、老けたかな
戸田　そういう事はさして問題じゃないんだ。
咲子　老けた？！
戸田　そりゃ、十代の頃よりは。
咲子　そうか。そうよね。うん。
戸田　別に咲子のせいじゃないよ。
咲子　本当に？
戸田　たぶん。
咲子　もうお払い箱かしら？
戸田　君がそう思うなら、君の自由にすればいい。
咲子　今日、取材の人、例の人が来るって言ったでしょ。
　迎えに行ってくるから。

咲子、憮然として出て行く。

オペラ座のネズミ

「オペラ座のネズミ」

遠くで河野の話し声と少ししてから車の発進音が聞こえる。
一人になると、頭を抱える戸田。加奈江が人知れず、入ってくる。

戸田　私は、もう目を閉じてしまいたい。
加奈江　私はあなたを裏切りません。
戸田　私は、私ではない、私の絵を描いている訳ではない。
加奈江　私はあなたを理解します。
戸田　私は、
加奈江　あなたはあなたの見たままに、筆を走らせているに過ぎない。
戸田　一度アトリエに入ったら自分の精神なんていらない。
紙があって鉛筆があって、筆があって、ただそれだけなんだ。
ただ、それだけ。
（戸田、言いながら凶狂として来る。明らかに目の色が違う。
別人のように語り方、身振りや手振りが変わってくる）
加奈江　そう。何の役にも立たない。
戸田　だってそうだろう。彼女たちだって、舞台の上では無心。
しかしその裏でさまざまの細かい社会を生きていた。
加奈江　あなたは、あのパリを生きていたのね
戸田　私は、そう。あのパリを。
ぼしゃぼしゃと湿った空になんとも暗い建物の影。

喫茶店でアプサントを飲む人たちの憂鬱な顔を横目で眺めながら、
私はあの通りを彼女たちの稽古場に向かって歩いた。
踊り子たちの筋肉の動きや俊敏な体の表現は本当に魅力的だった。
オペラ座のねずみと彼女たちが呼ばれていたことを知っているかい？
宝石に囲まれて豪奢な暮らしをしていると思われがちだが、
彼女たちのたいていは貧しい家の生まれで、
舞台に上がるということは、自分のスポンサー、
すなわちパトロンを探すためだったんだ。
信じられない話だが、それが彼女たちの生き様で、
それは汚い舞台裏で、しかし舞台の上では、
フットライトが彼女たちを浮かび上がらせ、それは、
神秘的で、刺激的な、夢の世界を演じていたんだ。
その差、これは縮図だよ。だからこそ、いぎたない、
舞台裏をも描いてやりたいと。そう思わないか？

加奈江　あなたは、

戸田　私は確かに生きた。あのパリで。私は……！

戸田、絵を描くように詩を読む。
つむぐ言葉のその中から、踊り子たち次々と飛び出してきて跳躍。

彼女は踊りながら死んでゆく。
彼女のステップのリボンはもつれるうちに
彼女の肢体は鳥の動作のうちに沈み倒れる。
青き水から出てきたばかりのシルヴァーナは羽を立ててはは身繕いし

再生と愛の喜びが、その頬に、目に、胸に、その生まれ変わった全身に。
そしてその針の足は快楽の型紙を縫い取って行く。

踊り子　愛してるわ！

奇跡のような彼女達の大半は貧しく
小さなネズミたちが今日も私の前でポーズする。
しかしその足をあまりにすばやくたたみ返すので。
飛び上がる少女は追おうとする私の哀れな目を擦り減らす。

戸田、彼女かたちと戯れながら、時にその手をとって歩きながら、しかし誰も選ばず、ただ無心に筆を走らせる。しかし、戸田、何かに迷うように筆を止める。踊り子たちだけが、遠ざかる音楽の中で踊っている。

戸田　　これも、違う気がする。

白けたカーニバル。写真のような踊り子たち。いつの間にか加奈江はいない。

戸田　　彼が私に語りかけるのです。私は彼の言うままに筆をとりました。

だから、私は、私のオリジナルであり、違ったものを、

表現してしまっているだけなんです。
河野は私を利用します。でもそれでもいいと思っていた。
私だけは本物だと思っていた。でもだれも、たぶん、
咲子も理解してはくれないでしょう。

しばしの沈黙。

「間奏」

そこに突然、非日常のモーションキャプチャー男現る。「どーも。モーションキャプチャーです。」彼が右手を上げると、踊り子たちも右手を上げる。プレイステーションの音？　ダンス始まる。出来ればステイアウェイみたいなの。戸田、偽者だ、虚構だ、人真似だ！違う！本物だ！と、言い駆けずり回る。

暗転

東京からの記者

「東京からの記者」

車の停車音がして、明転。アトリエには、伸びたＰＳ２のコードと、空いた冷凍ピザの箱が置いてある。あきらかに数時間後。二人の親しげな会話が聞こえる。

戸田は目頭を押さえてイスに座っている。そこへ、ドアが開いて咲子と桂木が姿を現す。

咲子　お昼、食べたのね、よかった。
　私たちも道すがら済ましてきちゃったからどうしようかと思ってたの。こちら、さっき言ってた桂木さん。記者の…

桂木　はじめまして。

戸田　（なんとなく頭を下げる）

咲子、桂木にイスをもうひとつ持ってきてどうぞ、と差し出す。

咲子　今、お茶入れますね

桂木　ああ、あの、大丈夫ですから。

咲子、ピザの空き箱をもって出て行く。しばしの沈黙。

桂木　だんどりは、どのように？もう始めます？
戸田　え？
桂木　これだから、画家先生たちってのは。
ええ、いいんです、いいんですよ。
こちらとしても先生方の証言は本当に助かりますし、
気にしないでください。あなたたちはとやかく言われる
ことなんてないんですから。
さっき、廊下で会った人、彼、河野さんですね。画商の。
いろいろ調べさせてもらいましたよ。同期なんですって
ね。
美術学校時代の。彼、あまりいい評判がなくて有名です
ね。
戸田　最近では、あの、滝沢だって噂すら……。
滝沢？

咲子、お茶を入れて持ってくる。

桂木　ご存じない？　あの天才贋作画家、滝沢ですよ。
戸田　はぁ、すみません。

咲子、二人にお茶を用意し、お茶菓子を出す。桂木、すぐにお茶に口をつける。戸田は手を出さない。桂木、煎餅の袋を開けて食べながら。その様子は戸田にとって見れば不躾で礼儀の無い動作。いやな顔をするが桂木は気にしていない。

桂木　ありがとうございます。……で、なんでしたっけ。そう、ええと確か……

咲子　滝沢？

桂木　そうだ、そう、どうも。ええ。滝沢という贋作画家がいまして。

戸田　ちゃちゃを入れるな！

咲子、黙って、しかしかなりむっとしながら部屋から出て行く。
桂木、胸ポケットからタバコを取り出す。

戸田　タバコはちょっと。

桂木　え！え、え、ああ、はい。
（タバコをしまう。）

間

桂木　やはり、辛いですか。あの、その、なんていうか……。

戸田　もう、なんだかんだで長い付き合いですから。

桂木　ええ。

戸田　一つのある習慣を変えようと思ったら、
それは大変な事なんですよ。
これでいいのだろうか、どうだろう、どうしたもんだろうと、
悩み、苦しみ、それは苦痛で取り留めのない色々の事が
頭の中を突き刺すもんだから、キリキリとココ
（といって米神を指して）が、痛むんですね。

桂木　はぁ。
戸田　だから改革者の痛みってのも最近は、ですが。
　なんとなくこんなもんなんじゃないかと思うわけですね。
桂木　今後なにか、新しいことをはじめるおつもりで
戸田　ルネサンスのから印象派へ……。
桂木　はぁ。あの…―それは
戸田　ええ、ですから巨匠たちも悩んだことでしょう。
　自分たちの生前は理解を示さなかった画商たちが死後、
　希少価値と銘打って、本来支払われるはずだった評価や
　財産を横取りしたんです。しかしね。
　これはどうしようもないことかもしれないが、
　これに対するには私たちも利口にならなきゃならないっ
てことです。
桂木　はぁ。
戸田　はぁはぁ、ふんふん。とそれで判ってしまうもので、
　理詰めで語って判ることは結局は愚かな知識の集積にし
かありません。
　わかりますか。
桂木　……すみません。
戸田　大丈夫です。

　天井から足音がする。桂木、天井を見上げて、それから再びメモを取る。

桂木　ゲーム、お好きなんですか？　（棚に置かれたゲームソフトを見て）
戸田　まぁ。
桂木　へー。なんか、こう、不釣合いですよね。

あ、いえ。悪い意味では…あの、どんなものを？

戸田　塊魂とか……サイレンとか……

桂木　……すみません。あまり詳しくないので…、
やはり、なにかインスピレーションを受けたりするんですか？

戸田　いや、それは。

そこへ河野が入ってくる

河野　おい、

桂木　あ、

河野　え、

戸田　朝話した、記者の。

河野　あ、そう。どうも…お取り込み中。いま、足音がしなかったか？

戸田　加奈江でしょう

河野　……。

桂木　加奈江さん、というのは

戸田　家政婦です。私たちがここに越してくる前からここの管理をしていた人で、
それからもずっと色々としてくれてるんですよ。

桂木　へぇ～。なんかいいですね

河野、怪訝な面持ちで去る。

桂木　河野さんですね

戸田　はい。
桂木　なるほどね。咲子さんの言うとおりの感じだ
戸田　咲子が何か。
桂木　いえいえ。なかなかのインテリジェンスだって…
戸田　……。
桂木　咲子さん、彼女も知ってるんですよね。いや羨ましいですね。
　彼女みたいな人が奥さんなんて
戸田　妻じゃないです。
桂木　え、あ、ええ。知っていますよ。でも
戸田　モデルですよ

戸田、すっと席を立ち、もういいですか。といい、部屋から出て行く。桂木、ポカンと取り残される。

桂木　モデルったってね。騙されるもんか！　やることちゃんとやってるくせに。
　すっぽんぽんにして絵描くんだもん。やーらーしーいー！
（以下、一人芝居）
「あ、だめです、先生！早くお描きになって。」
「なにをいっているんだい、君の中までしらなけりゃぁ、本当の君を描くなんて出来ないんだよ。」
「でも、でも…。」
「君の裸を現すだけならポラロイドで十分なのさ。私たち画家はそれ以上のなにかを描き表すんだよ。」
「ああ、先生！」
「芸術だ！　芸術は爆発だ！　あーはははは！」

咲子、唐突に入ってくる。というか桂木、一人芝居を見られる。
桂木、激しく動揺し、髪をかきあげたり……。

咲子　あ、もう終わっちゃったんですか
桂木　まだ続けろと！
咲子　あ？
桂木　ごめんなさいごめんなさい、うそです。もうしません。
咲子　え？ああ、え、あの先生は？
桂木　あ、いえ。ああ、あの怒らせちゃったのかも。
咲子　ホント？まぁ、
桂木　勉強不足だったかもしれません。
　一通りは勉強したつもりだったんですが
咲子　言ったとおりでしょ。気ムヅカシイって。気にしなくていい。
桂木　や、僕はあまり利口ではないので…
咲子　勝手に人に妙な位置づけをするんです
桂木　はぁ。
咲子　なんだか暖簾みたいな人でしょ
桂木　暖簾？
咲子　暖簾に腕押し
桂木　ああ、たしかに。
咲子　あの人、なかなか人を認めない人だから。変な人でしょ
桂木　……はい。
咲子　最近、変人にも拍車がかかってきて、あることないこと色々と。
　もう病気なんじゃないかと。
桂木　失礼ですけど、信じられないですよ。
咲子　何が

桂木　いや、戸田さんとあなたの関係が。
咲子　関係？
桂木　その……。
咲子　私がモデルだから？　ああ、そういうことですか？
桂木　いえ、その、まぁ
咲子　セックスレス
桂木　は？！
咲子　ですから。
桂木　ええ？
咲子　うん。まぁ、パトロン、ね。車好きに弄らせてくれるし
桂木　車、好きなんですか。
咲子　ええ！そうなのよ。あれこれ改造して。
　ニトロ入れてぶっ飛ばしたり！
桂木　ニトロ！
咲子　快感よ！セックスなんかよりぜんっぜんね。
桂木　うう～ん。咲子さんならどこにいってもぜんぜん、
　あの、イケルと思いますよ。
咲子　え、
桂木　ええ。
咲子　ええ……ああ。
桂木　今度、東京にきてくださいよ！　自慢の車で首都高ぶっ飛ばして。
咲子　あ、いいですね。私、まえは六本木で働いてたんですよ！
　六本木ヒルズってすごいんですか？
桂木　すごいですよ！　ええ、すごい丘で、すごい高いんです！
咲子　え？！　ヒルズって丘なんですか？　あたしはてっきりテレビ局だと
桂木　え？！　いやいやいやいや、いろんなものがあって
　なんかあそこに住んでる人もいるんですって。
咲子　そんなところに住みたいものかしら？！　私はごめんよ。

桂木　ぼくだってそうですよ。
咲子　それでそれで、
桂木　それで、それで、（ヒルズについてありったけの知識をぶちまけるが、
　はっきりいって嘘！という感じのものばかり）
咲子　すごーい。
桂木　ええ。
咲子　私のいたころとはだいぶ違うのね
桂木　秘書とか？
咲子　何が
桂木　六本木で働いてたって、それともＯＬさんですかね！
咲子　ううん、私はコレコレ（ジェスチャーで水商売）
桂木　ええ！　じゃぁ、すごい高級な？
咲子　そう思うでしょ！　でもこれが違うの。
　あたしが働いてたところってのがまた、
　安いお金で飲めるボロッちいクラブでね。
　ママと女の子も何人かしかいないようなちっちゃいところでさ。
桂木　そうなんですか、いやぁ。でも六本木ですから、やっぱり……。
咲子　ホントよ！　来るのは萎びたサラリーマンとか学生さんとかで。
　それはそれで楽しかったんだけどさ。
　あの頃は、いつかは一流の所で勤めて座銀に店持つわ！
　とか思ってたんだけど。
桂木　はぁぁ。
咲子　あ、これ言ったらつかまっちゃうかな。
　私、十六のときからやってたんだけどね。
　入りたての頃、変なお客さんがいて。
　売れてない画家の癖に妙に羽振りがいいの。

だったらほかの店行けよ！　とか思うんだけどさ。
なぁんかレトロな感じが気に入ってたらしくて。
まぁ、その人が河野さんってわけなんだけどさ。
たまに自分の描いた絵を持ってきてね、飾ってくれ！
っていうのよ。変でしょ。その頃の彼って生き生きして
て、

希望に満ち溢れてて、将来名のある画家になるんだって
よく言ってたわ。あたし、なんかいいなって思ってた。
でね、一時期同棲してたんだよ。

桂木　同棲。

咲子　部屋も油絵の具の、あの嫌な臭いしかしないんだけど……
なんかそれが好きでさ。
狭い窓から見える景色をいっつも描いてたっけ。
東京なんて空が無いのに……。

桂木　それで

咲子　うん。でね、でもだんだん、彼、絵を描かなくなっちゃって

桂木　それは、どうして

咲子　分からないわ。ただ……天井が見えるって言ってた。

桂木　天井？

咲子　そう今は、その意味なんとなく分かる。

桂木　……そうですね

咲子　……。

桂木　……。

咲子　その頃かな、それより前かな。戸田ちゃん、先生と知り合
って
先生と河野さんって凄く仲のいい友達で、
よく三人でドライブしたりして、楽しかったな。

桂木　……。

咲子　で、戸田ちゃんに誘われたの。モデルにならないかって。

桂木　ええ

咲子　そりゃぁ最初はヤダって言ったんだけど、ほら、河野さんにも、ねぇ。
建前があるし。でも君じゃないと駄目なんだって。
彼もしつこいから、結局モデルになることになっちゃって。
でも、私の思ってたのとは違うのね。
戸田ちゃんが特殊なのかもしれないけど、
指一本触れようとしないんだもん。でもさ。
河野さんにばれちゃって。それで……ね。判るでしょ。
桂木　まぁ、普通ならそう思いますよ。
咲子　私も悪かったんだわ。私もね、その頃の河野さんより、
ストイックにひたむきに絵を描く戸田ちゃんのほうがステキに見えた事は確かなのよ。それに、
河野さんは人の絵は描かなかったから。
私が絵のモデルになれたのは戸田ちゃんのおかげだし…。
桂木　モデルになりたかったんですね
咲子　そうじゃないわ。ただ、将来残ったとして、
それで美術館とかに飾られたらなんかいいじゃない？
桂木　……。
咲子　あたし、本当になんの取り柄も才能も無いから、
何かを残せたら、っていつも憧れてたから。
桂木　分かります。
咲子　でも先生もさいきんめっきり。
桂木　描かれないんですか
咲子　うん。
桂木　また、じゃぁどうしてこんなアトリエに？
咲子　会いたくないのかな誰にも。私にも…。

（間）

桂木　でも、咲子さんは、その……美人だと思います。美人も才能ですよ

咲子　あら！　なによ、すっごく嬉しいこと言うじゃない！

桂木　さ……サンクチュアリ！

親しげな雰囲気。そこへ河野やってくる。

桂木　ああ、先ほどは挨拶できずにすみませんでした。
　フリーでライターをしてます、桂木といいます。
　河野さん、お名前はかねがね…

河野　桂木……？　知らないけど、よろしく。

咲子　まだ駆け出しなのよ

河野　だろうね。じゃなきゃこんなところ来るもんか。
　大方、著名な画家先生がたにはことごとく断られたって感じなんだろうけど。

咲子　河野さん！

河野　だってそうだろう

桂木　いいんです。その通りですから

河野　こんなところに来たって記事になんかなるもんはないよ。

咲子　河野さん！

桂木　わからないですよ。将来、どんな展開があるかなんて。

河野　ふん、そうかね

桂木　それがどんなに近い未来、たとえ数分先だって、
　僕らにはなんにもわからない。
　そうでしょう。

河野　そうかもな。ああ、やっと判ったよ。
　戸田が不機嫌な理由が。ふん。あの程度の画家すら
　満足にさせられないなら、君は記者として向いてないよ。
桂木　……。
河野　咲子ちゃんも咲子ちゃんだよ。
　あんまり戸田をほっておくと、あいつ、拗ねちまうよ
咲子　関係ないわ
河野　俺が困るからいってるんだ。
咲子　戸田ちゃんが私の言うことを聞くと思って？
　そんなわけないじゃない。彼は彼よ。孤独な人よ。
　私なんて彼には必要ないんだわ。そのくらい判ってるでしょ！
　私を彼との通訳に使わないで！　他人は他人だわ。
　判らないものは分からないのよ。
河野　おお、怖い怖い。
咲子　ごめんなさいね、桂木さん。すこしくつろいでいってください。
　リビングに案内しますから…。
桂木　いえ、でも
咲子　でもここじゃぁ、さすがに壁壁するでしょ。こちらへ。

咲子と桂木。出て行く。河野、取り残される。

プラン

「プラン」

加奈江、音もなく現れるが河野は気づいていないらしい。加奈江、奥からじっと河野を見つめている。河野、適当に遊びながら、戸田を待っているらしい。しかし、来たのは咲子だった。

咲子　もうほおっておいてよ！

咲子、河野に筆を投げつけるとイスに突っ伏す。

河野　何するんだ！
咲子　一人にして！
河野　なぁ。絵を知らないか？
咲子　うるさい
河野　最近、あいつが描いた絵を見てないか。例のシリーズの……
咲子　絵なんか知らないわよ！絵なんか描かれないわよ！
河野　俺に当たるな！
咲子　そう思うならでていってよ
河野　ホステスふぜいが偉そうに。
咲子　なによ、そのホステスふぜいに惚れてたのはあなたじゃない
河野　よくも抜け抜けと、シャーシャーと
咲子　（咲子、うつむいたまま無言）
河野　……俺のところに帰ってくるか？

咲子　何をいまさら言い出すの。
河野　そんなに辛いなら帰って来いよ。なぁ
咲子　自分勝手よ！
河野　お前が言うこっちゃない
咲子　それに絵を描かないあなたなんて魅力無いわ
河野　戸田だって同じだろ
咲子　違うわよ！戸田ちゃんはちがうもん
河野　何が違うんだ、どこが違うんだ。
　俺とあいつを比べて俺の何処が劣るんだ。
咲子　全部よ
河野　なに
咲子　傲慢で、自分勝手で見栄ばかり気にして
河野　お前に何がわかる！
咲子　あなたに何がわかるのよ！
河野　金も無い、ゆとりも無い、性格だって破綻してる。
　そんな奴の何処がいいんだ
咲子　すくなくともあなたより歪んでないわ
河野　お前に言われる筋合いは無い！
咲子　なんですって？
河野　東京に戻りたいんだろ
咲子　……。
河野　店出すんじゃなかったのか
咲子　もう、いいのよ
河野　よくない！　お前の夢はどうなるんだ。
　あのままあんな生活力の無い男とここにいて心中するつもりか
咲子　自給自足でやっていけるわ
河野　無理だ！
咲子　戸田ちゃんを悪く言わないで
河野　俺はただ……君に幸せになってもらいたいだけなんだ

咲子　私を理由に使わないでよ！　私は十分幸せよ！
河野　嘘だ。わかる。君は辛いんだろう。今の生活が君には似合わない。
　俺なら君を、君の望みをすべて叶えるよ。だから、一緒に行こう。
咲子　男ってのはどうしてこう……
河野　ほら。

　その様子をいつの間にか戸田が傍観している。気がついた二人が動きを止める。

戸田　どうぞ、ご勝手に
咲子　……。
河野　……。

　戸田、アトリエに入ると黙々と作業を始める。

咲子　……どうして？
戸田　……。
咲子　どうして、どうして平気なの。
戸田　……。
河野　はっ……。答えてやったら？
咲子　冷たいな。冷たいよ。戸田ちゃんは冷たい
戸田　冷たい？
河野　……。
咲子　そうだよ。なんとも思わないの？

戸田　よく、わからないね。
咲子　私のことが嫌いなの？　ねぇ
戸田　…―。
河野　はっきり言えよ。
咲子　あなたはだまっててよ！
戸田　今は、どうでもいい。
河野　咲子、もう行こうよ。
咲子　うるさい、うるさい！　勝手にしてよ！
　　ああ、勝手にするわよ！出てってよ！
　　あんたには関係ないわ！
河野　……。

河野、出て行く。咲子と戸田。しばらく沈黙する。

咲子　戸田ちゃんは、あたしを何だと思ってるの？
　　ねぇ、黙らないでよ。黙って、そうやっていつも逃げて、
　　卑怯だよ！　あたしがどうなってもいいわけ？
　　ねぇ、そうなの。ねぇ。逃げないでよ！
　　聞いてるなら……こっち向きなさいよ、向きなさいよ！
　　逃げるな！
戸田　声が大きいよ。
咲子　ふざけるな！
戸田　加奈江だって……。
咲子　……。そうやって誤魔化すんだ
戸田　そんなつもりは。
咲子　加奈江って誰よ！　誰なのよ！
　　確かにあたしとあなたは、ええ、どうでもない関係かもね。

望んでない？　そうなの。そうなんでしょ。
あなた興味ないんだわ。私に？　いいえ、あなた以外に興味ないのね！
加奈江？　いつの女よ。私は咲子よ！　加奈江じゃないよ。
加奈江加奈江っていいかげんにして。え？
なんだっけ。とにかく？
そうやっていつまでも自分と戯れていればいいわ！

戸田　そうだね。
咲子　出て行く
戸田　そうだね
咲子　……引き止めないんだ
戸田　……。
咲子　私ってそんなにあなたにとってどうでもよかった？
戸田　そんなことは、ないけど
咲子　酷いね。冷たいね。嘘でも、引き止めるとか、してくれないかなぁ。
戸田　無駄でしょ
咲子　……（聞こえない）だったのに。
戸田　……ありがとう。
咲子　……大嫌い！

咲子、勢いよく飛び出していく。

戸田　すまないね、加奈江。
加奈江　いいえ。

車の発信音。

戸田　私は、もう耳を塞いでしまいたい。
加奈江　私はあなたを裏切りません。
戸田　私は、私ではない、私の中で違う者が蠢いている。
加奈江　私はあなたを理解します。
戸田　私は、誰にも理解されない。
加奈江　私は、
戸田　いいんだ。誰もが、その当のモデルまでが、
モデルと画家の関係性を猥らで卑猥な関係だと
位置づけているんだ。でも、私の中の彼は、
それを望んでいないよ。
むしろ、鍵穴から覗いたままの、
ありのままの女を観察して……ほら。ほら！
（スケッチブックを捲りながら）
加奈江　私はいつも自然でいられます。
戸田　どうしてわからないんだ。皆、分からないんだ。
なんて不可解な生き物なんだ。
加奈江　私はあなたを理解します

戸田、加奈江を押し倒す。加奈江は抵抗せず、じっと戸田を見ている。戸田、傍目に見れば泣いているように見える。赤い踊り子、音楽とともに出てくる。キトリのソロ。慟哭と対照的な激しい音楽。

戸田　私は、私がわからない。言い訳は、できない！

音楽、高まり暗転。

「間奏」

モーションキャプチャー男、背広で舞台中央の椅子に座っている。ちょっとけんか腰。

男　「僕が何をしたって言うんですか。　だからぁ、それは誤解なんですって。云々（アドリブで小話。笑いをとるような。）」

誤魔化す為につむぐ言葉も、繰り返せば真実になる。しかし、貴方の真実は他人の虚でり人の虚偽は貴方の真実になっているとも考えられないか。人は信じるに足るか。自分は信じるに足るか。世界はただ貴方の脳内をめぐっている電子記号の認識でしかないのだ。としたら、どんな偉人の偉業も自分のものに出来るではないか。

誘い

「誘い」

桂木　先生、先生
戸田　……。
桂木　こんなところで寝られてはお風邪を引きますよ。
戸田　寝る？
桂木　ええ……あの、
戸田　咲子は？
桂木　ああ、ええ、その……出て行かれてから一時間ほど。
戸田　夢じゃないんだ
桂木　何か、あったんですか？
戸田　……。
桂木　いえ、聞かないです。聞きません。聞く必要も無いですよね。
　立ち入ったことですし。ね。僕、そろそろおいとましますね。
　その、挨拶に来ました。
戸田　ああ
桂木　あの
戸田　え？
桂木　あの、一ついいですか。先生は、その、
　河野さんをどうお考えなんですか
戸田　どうって
桂木　咲子さんから色々聞いたんです。
　あの、もし、これで後悔するようならば、僕等は、

あなた方と色々取り決めたこの方法は無理だったことにして、
別のアプローチをしますから…。
戸田　今更でしょう。
桂木　確かに、そうですね。僕らはもう正直行き詰ってますよ。
あの絵はまったく見つからないし、よくない噂もあるし
正直なにが本当でどれが嘘なのか。
あなたの証言に頼らなければならないほどに
どうしようもなくなっています。
でも、まだ、まだほかに方法があると思うんです。
戸田　方法って？
桂木　それは……僕ではわかりませんが。
戸田　君、いくつだっけ？
桂木　二十七です
戸田　若いね。
桂木　はぁ。
戸田　僕と彼がなんだって咲子が言ったんだ
桂木　あの、とても仲がよろしいと
戸田　そうなのかな
桂木　は？
戸田　そう見えているんだろうか？
桂木　え？
戸田　彼も、彼がどう思ってるなんて分からないだろう
桂木　でも、それを言ってたら……。
戸田　だから若いって言ったんだ。
桂木　でも、僕は難しいことは分からないですよ、
哲学とかはっきりいって全然分からないし。
でも、これだけ長い間一緒にいた仲なのに？
戸田　利害が一致してたから
桂木　そんな。

戸田　こんなことを言う人間に罪はあるか。
桂木　刑法上、罪はありません。どうしようと
　それが犯罪で無い限り、人は罪に問われません。
戸田　犯罪であっても
桂木　司法取引を無効にしたいんですか。あなたは
戸田　そうじゃない。
桂木　分からない人だ
戸田　そういう評価は素直でいいと思うね。
桂木　戸田さん、あなたは…。

外の足音に気づき会話、止まる。

桂木　いろいろ、お世話になりました。
戸田　なにも、してないよ
桂木　……。
戸田　もうそろそろ、暗くなるから。
桂木　ありがとうございました。

桂木、一度振り返るが、そのまま帰る。入れ違いに河野、入ってくる。河野かなりバツの悪い顔をしているが、戸田は無関心である。

河野　いや、また派手にやったな
戸田　……。
河野　もう帰ってこないんじゃないか
戸田　それならそれで、彼女の自由だ。
河野　お前ってやつは昔から甲斐性ってもんがない男だな

戸田　甲斐性？
河野　かわいげがないってことだ。
戸田　……。
河野　いいのか？
戸田　なにが
河野　本当に、信じられないよ。それでいいのか。
　なぁ……咲子のやつ……心配じゃないのか
戸田　彼女だってもう大人だよ
河野　俺はお前が嫌いだよ
戸田　どうでもいいよ。そんなこと

　河野、ムッとしているが抑える。戸田はいつもと変わらないが、なにかふ抜けた様子。

河野　あの記者、帰ったのか
戸田　ああ。
河野　どうやって？
戸田　？
河野　まぁ、いいか。ところでお前、絵を持ってるんだろう
戸田　絵？そんなもの、ここにいくらでも
河野　そうじゃない。例のシリーズの
戸田　踊り子の？
河野　そう。ドガの。
戸田　（ちょっと不満げに）ない。
河野　隠すなよ。
戸田　それに、あれは私の作品だ。
河野　はいはい。そうですね、じゃぁ、言い方を変えようか。
　戸田先生の作品はもうないのですか？

戸田　……。
河野　もうかかないのか？
戸田　君がアレをどうやって売っているのかは差し置いても、
　もう、描けない気が……。
河野　描けない？
戸田　前は、こう、夢に入るみたいに素直に描けたんだ。
　こう、彼の生きた時代を思いながら、
　そうすると私の中で彼が目覚めるんだよ！
　彼が私の手を取り言うんだ。
　直線を引きたいなら極めて歪んだ曲線を描くんだ、と。
　彼が私の体を使って、彼の見えなくなった目の変わりに私が見て、
　踊り子たちを描くんだ。だから、私は彼の代行に過ぎないんだ。
　でも今は、なんていうか、自分の中の自分自身が否定している。
　脅えている。
河野　罪悪感に？
戸田　私はなにも悪いことなどしていない
河野　コピーはコピーだ
戸田　違う！複製ではない。あれは私の…彼の…
河野　なんでもいいが、いい加減でもいいんだよ。
　君のアレは高値で売れる。君のほかの作品に比べて、
　アレは特に好い。タッチも本物と見分けがつかないし、
　それになにより、作品のオーラが違うよ。
　他の画家も手持ち無沙汰にこういうアルバイトはしているが、
　君ほど長けている画家は稀だ。どこまでも自分を殺せる男だからな。
戸田　……。

河野　ま、それはさておいてもだ。例の絵、君が持っているんじゃないか？
戸田　例の？
河野　例の盗まれた……？
戸田　まさか！
河野　自信がないのか？　自分のサクヒンに？かつて美大で秀才と謳われた君が？
戸田　何がいいたい？

そこへ、勢いよく桂木が入ってくる

桂木　すみません！　あの、どうやって帰ればいいんですか！
戸田　……。
河野　……。
桂木　あの……。

気まずい間。

戸田　車で送るよ。
河野　車、咲子ちゃんが乗って行ったんじゃないか？
戸田　……。
河野　……。
桂木　……と……とめていただいてもよいでしょうか
戸田　……。
河野　いたし方あるまい。明日、うちの運転手に送らせるよ
桂木　すみません、すみません。本当にすみません！

戸田　いいよ。
河野　部屋は？
戸田　とりあえず、空いてる客間があと一つあるから
桂木　すみません
河野　案内しよう。ついでに、夕飯でも作ってもらおうか？
桂木　え？！　料理はちょっと……。

河野、桂木、去る。
戸田、再び一人になる。すると、どこからともなく、少女たちの笑い声、そして足音が聞こえる。

戸田　咲子？

突如壁から滴露のように白い腕、現れる。それは敵意をもった腕。そして壁からウィリたちがぬるりと現れる。狂ったように取り囲みながら踊り続ける。ホリの前に牢に囲まれたもう一人の影、赤くシルエットで浮かぶ。逃げ場は無い。なぜなら彼自身であるからだ。戸田、最初呆然と見ているが、とたん、怖くなったのか逃げ惑う。行く手をふさぐウィリたち。その中には、咲子もいる。

戸田　なぜ攻める、なぜ責める。なぜ悪い。
所詮他人を喜ばせる所業じゃあないか。
フィクションを売るメディアや、虚を言い楽とする占いと何が違う、
なぜ責められる。違う！
お前たちは私のものだ。有り得ない、有り得ない。

お前か、そうか。私はお前の偉業におびえているのか、
だが平伏すものか。俺はお前と何が違うものか。
現にお前はここに現れた。私とともにいた。
私はお前を生きてきた。この世界では祖は称えられるようだが、
ならば出版は、写真は、デジタルは、歴史は、遺伝子は、
私と何が変るのか。糞、忌々しい、消えろ、頼む、消えてくれ。
消えてくれ！消えろ！

戸田、迫り、叫びキャンバスをナイフで切り裂く。影、何かに迫られるように後退（前進）し、次の瞬間、咽喉元に突き立てられるナイフ。影と踊り子たち、はたりと動きを失い、その場に倒れ付す。全てがカットで変る、

間

戸田　もう、止めよう。もう。あなたたちは、死んだんですよ。

戸田、電気を消す。（暗転）

崩落

「崩落」

一瞬暗くなったように感じるが、目が慣れてくるにしたがって徐々に暗闇の中の自然の灯りで周りが見えるようになってくる。ドアの外からにぎやかな食卓の声と食器の音が聞こえる。部屋の中に加奈江が立っている。キャンバスの前に立って、じっと視線を投げかけている。不意に机の上の食パン（木炭消し用）を一口食べて鼻をすする。

加奈江、中央に立ち、ふと目をふせる。耳の痛い静けさ。黒鳥。偽りの哀愁。

加奈江何かの気配を感じたのか、ふいに動きを止める。

そこへ、河野アトリエへ入ってくる。手には懐中電灯。

加奈江には気付かぬ様子。しきりに何かを探している。加奈江、後ずさりする、スタンドライトが、点滅し、河野、スイッチを切る。（しかし切ってある）河野、ぞっとして、いても立ってもいられずに、現実に立ち返ろうと、探し物を再開する。加奈江、河野の肩にそっと手をおく。河野、わっと叫んで身をかわし、振り向くが見えない。

河野　　え？

桂木　　なにをしているんですか

河野　　え？

いつのまにかドアの前に桂木が立っている。

河野　　……。
桂木　　何を探しているんですか
河野　　なんだ、脅かさないでくれ。
桂木　　……。

桂木、河野に近寄る。加奈江には気付かない様子。加奈江、部屋の隅に佇み、影そのものと化す。

河野　　戸田は？
桂木　　お休みになったみたいです。今日はいろいろとお疲れになったようで
河野　　そうか。
桂木　　……。なにをしていらっしゃるんですか？
河野　　君の知ったこっちゃない。ただ、探し物をね
桂木　　お手伝いしましょうか
河野　　いやいや。いいんだよ。ちょっとプライベートに関するものだし。
桂木　　……。
河野　　君もそろそろ休んだらどうかね
桂木　　いえ、その。目が冴えちゃって……なれない枕だと寝れないんですよ。
河野　　……。

桂木　ええっと……河野さん……あの。
河野　何？
桂木　戸田先生って変わった人ですね
河野　画家なんて皆あんなもんじゃないのか。
桂木　ええっ。いやぁ……そうですけど、確かに個性的な方は多いですけど
河野　なんだ
桂木　あそこまでこう、閉鎖的というか、
　人間不信の塊みたいな人は珍しいですよね。
河野　ああ、
桂木　昔からそうなんですか？
河野　昔？
桂木　いえ、咲子さんからいろいろとお話を伺いまして
河野　咲子が？　……ああ。
桂木　ええ
河野　で、何が言いたいわけ？
桂木　え？　別に
河野　俺がひどい男だって言いたいのか？
桂木　そんなことといってないじゃないですか。
河野　他人の過去に足を突っ込むもんじゃないよ。
　そんなに面白いスキャンダルじゃないだろ。良くあること。
桂木　よくあること？
河野　そうだろ。画家とモデルの関係は。
桂木　え？　でも彼らはなにも……。
河野　信じてるの？
桂木　え？
河野　君、そんなんじゃ世の中渡っていけないよ。
　ああ、だからこんなドサ回りみたいなことやってるのか。
　性が出ますね。

桂木　……。
河野　まぁ、仮に信じたとしても関係ないね。
　そんなことはどうでもいいんだ。
　そんなことより、何より戸田のほうが問題だろう。
桂木　問題？
河野　あいつは何でもかんでも人から奪って生きてる寄生虫みたいな男だ
桂木　そんなこと
河野　無いと？　お前に何が分かるんだ。
　今日あったばかりの人間が軽々しく批評なんか述べるもんじゃない。
　それとも何か？　画商って職業が醜くお見えかな？
桂木　正直。少しそうは思いますよ。
　河野さんも昔画家を志したことがあるならば、
　どうしてこんな……昔ながらの画商みたいな
　作家を殺すような売り方してるんです？
河野　何を調べてきたのか知らないが、人の商いに口を挟むもんじゃない。
桂木　戸田先生の絵、拝見しましたが、素晴しいですね。
河野　だろうな。あいつは天才なんだよ。
桂木　もっと世間に知れていいはずです。
　あなたが差し押さえているんでしょう
河野　どうだか
桂木　卑怯じゃないですか。
河野　はいはい。それで、戸田が売れないのが私のせいだと言いたげですが、
　正直かまってやってるだけありがたいと思ってほしいくらいだよ。
　あいつのあの性格じゃ、ほかの画商達が煙たがるのも無理ないだろう。

しかも、最近まったく新作をださないときちゃぁ、ね。
桂木　お付き合い長いんでしょう
河野　長いから分からないんじゃないか。
いいか、お前と私のような他人行儀な関係ならば、
建前や化けの皮をかぶった付き合いができる。
そいつは世間的にはなんとも分かりやすくていいってもんだ。
だが、そんな面の皮がお互い通用しないとなるとどうだ。
痛みわけって事になる。無様な。
桂木　格好つけたいんですか
河野　分からないならそれは、お前が乏しい人間であることの証明じゃないのか
桂木　そうですね。
河野　ガキはクソして眠る時間だ。
他人の事情に首を突っ込む暇があるなら、
少しは今日泊めてやったことへの礼のしかたでもじっくり考えるんだな。
何分君には礼儀ってものがなさ過ぎる。
桂木　失礼ですがあなたに言われたくないですね。
河野　あ？
桂木　そういうわけにはいかないっていってるんですよ。ねぇ、滝沢さん
河野　なに？
桂木　滝沢さん、
河野　何をいうのかね？　私は河野だよ
桂木　いえね。実のところ、今日ここに訪れた本当の目的は
あなたのほうだったんですよ。河野さん。
あなた、いつも物騒な取り巻きを引き連れてますから、
こうでもしないと、二人でお話なんてできないと思いまして。

河野　……やはりな。なんとなくだが、そんな気はしていたよ。
　こんな売れない画家の元に取材なんてちゃんちゃらおかしいと思ってたんだ。
桂木　では？
河野　しかしね。滝沢とはまた物騒な話を持ち出すね。
　滝沢ってのはあの滝沢なんだろう。
桂木　ええ。何人もの巨匠と呼ばれる画家のタッチを描きこなし、
　贋作業界に神と謡われる……。
河野　そいつは名誉なことだね？　しかし何を根拠に？
桂木　アングラ記者の情報網を甘く見られては困りますよ。
　あなた、その手の取引相手には自分から名乗ってるそうじゃ
　ないですか。天才、滝沢画伯と
河野　……。
桂木　どうなんです？
河野　金か？
桂木　別に記事にするつもりなんてないですよ。
　ただ、絵を一枚いただきたいのです。
河野　絵？
桂木　ええ。一枚。
河野　物好きな。
桂木　例の盗まれたドガの絵知っていますか？
河野　ああ。そりゃ、あれだけ騒がれればいまやクソ餓鬼ども
　だって知っているだろうね。
桂木　あれが欲しいんですよ。
河野　……知らないね。
桂木　いいんですか。あなたの正体を白日の下にさらしても
河野　盗まれた絵なんて、あれは流石に私でも持ってないよ。
　あんな危なっかしいもの買うもんか。
桂木　分かってないですね。僕は悪魔で贋作画商の滝沢さんに

お願いしてるんですよ。
河野　なぜだ？　あれを見つけて有名にでもなりたいと？
桂木　あれの新作ならもうこちらに持っています。
河野　！
桂木　今日僕が来た理由、それは僕の趣味でもなんでもないんです。
　あるお方の代理としてやってきました。
河野　……なるほど。なんとなく読めてきた。
桂木　流石ですね。
河野　選挙が近い、そういうことだろう
桂木　ええ。藤代議員は選挙の道具にあの絵を使ったんです。
河野　ただでさえ、いままで秘蔵コレクションだったあの絵が
　展示されるのは大きな反響をよんだんだ。
　まして盗ませて、騒ぎを大きくすればマスコミは否
　でも喰い付くだろう？　そこで議員情けの一言！
桂木・河野　西洋美術館へ寄付します。
桂木　印象がぐっと良くなる。
河野　ああ、だとしたら、なぜ贋作が必要なんだ。
桂木　藤代先生は手放すのがおしくなったんですよ。
河野　ああ。
桂木　以前からあの絵は贋作なんじゃないのかと、
　噂されていたのはご存知ですよね？
　でも、藤代先生はあの絵をいたく気に入っておられる。
　本物だと信じているんです。
　しかし、このまま絵が見つからないとなると、
　せっかくのプロパガンダも今一オチに欠けるじゃないですか。
　そこで、贋作を一枚用意していただきたいのです。
河野　つまりすり代えるわけか。
桂木　そういうことです。疑わしいと言われている絵です。

西洋美術館も展示の前には鑑定を念入りに行うでしょう。
ですから、もともと贋作であったならば、お蔵入り。
キレイにお流れというわけです。

河野　展示されればマスコミが何をかぎつけるか
分かったもんじゃないからな。
しかし、西洋美術館が贋作と大々的に発表したらどうなる

桂木　藤代先生の財力をなめちゃいけません。
彼の寄付とコレクションが今までどれだけ西洋美術館に
貢献してきたのかを考えればおのずとお分かりいただけ
るでしょう？

河野　……なるほど。

桂木　で？

河野　しかしね。こちらとしても、そんな話でやすやすと
相手を信用できるもんじゃない。
代議士が直接お見えになるならともかく、お前みたいな
小僧一人。

桂木　信用がないですか。

河野　そうだ。ま、商談の機会は用意してやってもいいが、
それ相応の対応をしてもらわなきゃ。

桂木、胸ポケットからタバコを取り出そうとする。タバコと一緒にちらりと見えた一冊の手帳。河野、桂木に近づくと、いきなり上着のポケットを探る。桂木、反抗するが、その勢いで色々なものが、床に落ちる。ペンと手帳。それは黒皮の…。

河野　あ！

桂木　……。

河野　お前、

間

桂木　そうですね。そうですよ。僕の本業はコレです。
河野　ははは。なるほど、うまくできすぎてるわけだ。
桂木　でも聞いてください。警察官にだって事情はあるんですよ
河野　知るかよ
桂木　僕は別に
河野　察と政治家は信じちゃいかんってな。
桂木　そういわれると思って正体を隠してたんですよ

天井から足音と少女の笑い声

桂木　え？
河野　咲子だろ
桂木　ええ？　そんなはず……。
河野　うるさい！　咲子だ。帰ってきたんだろう
桂木　まさか、そんな馬鹿な！　そんなはずない。だって車を……。
河野　ははっ、まんまとしてやられたってわけかよ。
　　ははは……クソ戸田から聞いたのか。戸田の奴、
　　どこまで人をコケにしたら気が済むんだよ。咲子も咲子だよな。
　　一度は好きあった仲なのになぁ。
桂木　信じてくださいよ。僕はあくまで藤代先生の
河野　信じられるかよ！　はは。こうまでしてくるもんかねぇ。

大学時代の同期に、生活の面倒見てやってる世話人に、
あいつのやってるくだらないほどチープで、
それでいて金になる、
認めるのも否なほど天才的な技術を買い取って、
どれだけ危ない橋を渡ってきたのか、何も、思わないのか。

何も。地位も名誉も財産も、ああ、確かにお前のものだ。
が、手を汚してきたのは誰だ。誰だと思ってるんだ。
畜生。飼いならされないって言いたいのか。
クソ。反吐が出る。世の中汚いねえ。何もかも。
なるほど、なるほど、なるほど…。

桂木　ちょっと、
河野　（戸田が憎い！）

河野、いきなり空のワインボトルで正面から米神あたりを桂木を殴打する。桂木、避け切れずに呻きたおれる。その様子を戸田、いつの間にか見ていた。

河野　なんだ、起きてたのか
戸田　……。
河野　あっけねぇなぁ。
戸田　……。
河野　お前、知ってたろ。
戸田　……。
河野　お前、こいつとグルだったんだろ！
ええ、どこまで人を見下せば気が済むんだ。

部屋全体にラップ音が鳴り出す。同時に笑い声や足音も聞こえる。

戸田　君が天才を名乗るから悪い。天才滝沢なんていやしない。
　かこつけの偶像だ。画家たちの所業を自分ものとしてひけらかすから。
　だから、全部君が悪い。
　君はそれだけの人の罪をひっかぶって罰を受けるんだ。

河野　戸田ぁ！

河野、戸田に掴みかかる。戸田、無表情。その河野の肩に触れる女性。加奈江だ。河野、飛びのいて、今ではもう加奈江が見えるらしい。

河野　いつから、いつから、一体いつの間に、君は、誰だ

河野、振り返って加奈江を見て、あとずさりながら周りを見ると、踊り子たちが姿を現している。河野、恐怖のあまり引きつりながら、逃げ惑うが、踊り子たちが逃がさない。

河野　ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、

ラップ音さらに高鳴る。

戸田　君もやっと理解したか。君が今まで目をそらし続けてきたその感情に。
憎しみと摩り替えていたその絶望に！
やっと見えたか。君にもやっと！
河野　！
戸田　私の描いた私の生きたパリの、踊り子たちのステージを！

音楽、高まり、戸惑いは絶叫へ。
踊り狂う踊り子たちと狂気の画家。

戸田　全部芝居さ、夢さ、嘘さ、狂気さ、これが世界だ。
全部芝居さ。唯のお芝居さ！出鱈目だ。出鱈目だ！
あははは、はははは…

戸田は笑い狂い、河野も絶叫から笑いへ、桂木は朦朧と起き上がり、しかし見えていない様ただ、戸田の変貌振りが異様。ラップ音高まる。加奈江がその影で河野を覆いつくしその体を抱きしめる。戸田は笑っている。すべてがフェードアウトし溶解する世界の中、桂木が一言つぶやく。

桂木　嘘だ。

エピローグ

「エピローグ」

以前に比べてがらりとしたアトリエ。ボストンバッグひとつ、どさりとおいて、イスに腰掛ける。戸田も荷物をまとめてやってくる。左手の薬指に指輪。

咲子　ここ。これ、全部置いていくの？
戸田　いらないから。
咲子　あ、そ。

戸田も適当に腰掛けて、二人息をつく。

咲子　忘れ物ない？
戸田　いいんだ。
咲子　……。
戸田　……。
咲子　河野さんには気の毒なことしたかしら。
　つかまっちゃったね。なんか私たちがハメみたいで気分悪いな。
　まぁ、ハメたんだけどさ。
　前々から仕組んでたなんて言えないわよね
　聞かされてるんでしょうけど。呪われそう。
戸田　彼は、僕の世界の一端を見たんだって。

咲子　でも、彼、本当にあの天才滝沢だっけ？だったのかしら。
戸田　さぁね。
咲子　だって、ねぇ。
戸田　タッチを完全に分けられる画家なんていない。だろ。
咲子　そう。
戸田　そう思うから警察も組織的な複数犯だと思ってるのさ。
　だから河野に目を付けたんじゃないの？
咲子　だからって、彼が？　でも、認めてるんだってね。自分だって
戸田　無いものねだりなんだ。
咲子　無いものねだり？
戸田　天才っていうのは完全無比の理想の女性みたいなものさ。
　手に入らない。
咲子　そんなもの？
戸田　そう。無いものねだり。
咲子　ふぅぅん。
戸田　だから言ってるじゃないか。
　彼は僕の世界の欠片を見たんだって。
咲子　世界って？
戸田　願望とでもいいますか。
咲子　ふぅぅん。
戸田　納得してないね。
咲子　しないわよ。そりゃぁ、だって刑事さんはよく分からないって。
戸田　あの人はそうだろうね。
咲子　そうそう、例の盗まれた絵、見つかったんだってね。
　結局本当はなんで盗まれたのかしらね？
戸田　さぁ。でもあれは……
咲子　そうよね。あれって戸田ちゃんの絵でしょ。
戸田　私の？　というか。まぁ。

咲子　ねぇ、あの絵が贋作なら本物はあるのかしら？
戸田　あるよ。ココ（頭）にね。
咲子　あたし、英語しゃべれないけどどうしよう。
戸田　大丈夫だよ。ロスはいいところだよ。
咲子　行ったことあるの
戸田　まぁ。
咲子　知らなかった！　でも、本当にいいの？　ついていって。
戸田　来て欲しいんだ。

戸田、咲子に何か渡したようだ。咲子、手の中を見て、感激のあまり涙ぐむ。自分で薬指にはめて、戸田とお揃いに。

咲子　これでやっと自由ね！
戸田　君が車っていう逃げ道をなくすためにまさかあんなふうに来るとは思ってなかったよ。迫真の演技だったね。怖かったし。咲子の怒ったの。あんなことしなくても、走って行っちゃえばよかったんじゃないの？
咲子　あら、それじゃぁ怪しまれるし、だめよ。
戸田　そうかなぁ。
咲子　それに、結構私、本気だったんだけど。
戸田　ごめん。
咲子　戸田ちゃんだってかなりクレイジーな感じだったわよ。
戸田　さぁ。さして変わりないんじゃないか？
咲子　本当に分裂病を危惧したわ。
戸田　あの感覚は憑依に近いんだと思う。
咲子　あれ、本気でいってたの？　ドガと私は一体だぁ！って
戸田　そうだよ。

咲子　理解できない。
戸田　いいよ。でもドガだけじゃないんだな。
咲子　え？
戸田　え？
咲子　冗談。
戸田　（笑って流す）
咲子　あ～あ。でも私も見たかったなぁ。
戸田　何を
咲子　怪奇現象！
戸田　ああ。
咲子　凄いわね。想いが何かを呼ぶのね？　念？　念の力？

そういいながら、咲子、部屋の中をぐるりと回り、戸田は置物など名残惜しそうに見ていたがその中に一枚のスケッチ。加奈江だ。

戸田　そういえば、加奈江ってどうしたんだろうね。
咲子　ねぇ、それなんだけど、加奈江さんって、本当は誰なの？
演　技でしょ？
戸田　え？ほら、いたじゃないか。家政婦的な、ここの建物の管理人。
咲子　だってあたし一度も見たことないよ。そんな人。
戸田　え……。
咲子　え～どんな人？
戸田　キレイな人だよ。物腰が柔らかくて、
咲子　完全無比の理想の女性的な？
戸田　そうかもねぇ。
咲子　……。
戸田　……。

咲子　戸田ちゃん知らないだろうけど……。
戸田　何を？
咲子　河野さん、天童って言われて育ったんだって。
戸田　で？
咲子　でも大学であっさり自分より才能のある人物が現れたんだって
戸田　……。
咲子　それが貴方。
戸田　……知ってたよ。
咲子　彼、認められなかったのよ。
戸田　だから画商になったんだ。
咲子　でも……。
戸田　だから無いものねだりだって言うんだ。
咲子　よくわからないわ
戸田　そんなところがいいんじゃないか。
咲子　ホント？
戸田　どうでしょう
咲子　意地悪。
戸田　あっはっは。さて、そろそろ時間だね。
咲子　私が飛ばせば一瞬よ。

二人、立ち上がる。

咲子　そうそう。桂木さんからきいたんだけど、河野さんね、
　なにやら夜な夜なうなされてるんだって！
戸田　なにを？
咲子　カナエ、カナエって！
戸田　まさかぁ！

咲子　まさか。
戸田　え？
咲子　ええ？
戸田　嘘だろ？

咲子、戸田、部屋を出る。戸田、電気を消す。暗転。暗転中にスタンドライトが意思を持ったように二三度、明滅する。そこに一瞬みえたのは……。

以上終幕

「後書き的な物」

誰がどこで何をどんなふうに嘯いているのか、
それを探してみてください。
全てが、嘘、フェイク・フィクション・ファンタジーでございます。

桂木はＷＣの方でスピンオフしてます。
ＷＣはｆの二年前の出来事です。
桂木は本庁に移籍してます。
あの頃と比べると大人になりました！
が、作品的にはこちらの方が古いものです。

エピローグ（後書き）

ここまでお付き合いいただきありがとうございました！
未熟な作品ではありますが、私の原点です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6789s/

f

2011年10月5日19時53分発行